

講演会

オーロラの大地から

写真家 松本 紀生 氏

2018年11月9日(金) 神戸学院大学

写真家の松本紀夫です。皆さんよろしくお願ひいたします。

場内割れんばかりの拍手をどうもありがとうございます。今日は僕がアラスカで撮ってきた写真やビデオを皆さんにたくさんご覧いただこうと思います。

アラスカに初めて行ってから、もう24年ぐらい経ちました。皆さんと同じように僕は大学時代日本にいたんですけど、そのときにアラスカと出会って、日本の大学を辞めて、アラスカ大学に入りなおして、そこから写真家を志して、写真を撮り始めて、今に至ってます。今では一年の半分、アラスカで過ごしています。年に二回アラスカに行くんですね。夏前後とそれから冬の間、アラスカに行っています。一回行くと三ヶ月くらい帰ってきません。残りの半年の間に日本にいて、こうやってスライドショーしながら全国を回ったり、原稿を書くといったような、そんな仕事をしています。今日はそうやって撮りためてきた写真やビデオを皆さんにたくさんご覧いただきたいと思います。

僕はアラスカで撮影をする時には、誰もいないところに行って、一人きりでキャンプをします。長いときには同じ場所で2ヶ月間、ずーっと誰とも会わずに生活をしたりするんですね。

冬はね、寒いんですよ。アラスカって皆さん寒いってイメージあるでしょ、冬はほんとに寒いんです。マイナス40度くらい普通になるところなんですね。そんなところで僕はかまくらを作って生活をします。もちろん、ガスも電気もないから暖房なんかないんです。ですから防寒着を着て生活するしかない、でも防寒着を着てても、普通に息をするだけで鼻の下にはつららができるし、すべてのものがカチコチに凍ってしまう世界なんですね。寒い寒いと口で言っても伝わり辛いと思います、それがよくわかる実験をしてきました。どんな実験かといいますと、雪を溶かしてお湯を作ります。そのお湯を空中にバーンと放り投げてみたら、空中でお湯が一瞬にして蒸発してしまうんですね。綺麗です、見事なもんです。マイナス25度くらいでこうなっちゃうんですよ。ですからほんとのアラスカはもっともっと寒いんですね。こんなところでかまくらを作ってキャンプをします。毎冬、50日間、キャンプをしています。誰もいない何もなくて生活しながら、オーロラを待ってるんです。冬のアラスカは景色が綺麗ですよ、たくさんの星が、肉眼で見えるんです。普通に星が見えるだけではありません。流れ星、いろんなところで実は流れてるんです、僕ら普段見えないだけで、アラスカにいくとね、気づかされるんですよ。流れ星ってこんなにあったんだっていうことに気づかされることが多いです。今日はアラスカのいろんな表情を皆さんに楽しんでいただきたいと思います。最後まで、ごゆっくりとお楽しみください。

アラスカというと、一年中寒くて雪と氷ばかりで、何もないところというイメージが強いんですけど、実はね、表情豊かなんです。四季があるんですよちゃんと。今日はまずそんなことで春のアラスカの話からしていきますね。春なんて僕はアラスカの中でも北の端っこにある北極圏というところに一人でいきます。道路も鉄道も何もないところですよ。行く方法がセスナしかないんです。小型飛行機を自分でチャーターします。そして何もない原野の上をただただ飛び続けて、キャンプをする場所まで連れて行ってもらいます。アラスカのパイロットものきなものです。制服なんかありませんよ。で、着陸する場所を探します。もちろん滑走路なんてものがあるわけではありません。むき出しの地面に「どすん」と着陸するんですね。平らな場所を見つけて着陸をしてしまいます。この後荷物を降ろしたら、パイロットはもう村に帰って行って、僕一人での生活が始まります。僕はテントを張ってキャンプを始めるわけですね。春の北極圏というのは白夜の季節なんです。皆さん白夜ってお聞きになったことあると思いますけれど、何かというと、白い夜と書いて白夜、太陽が沈まないんですね、夜になっても太陽が沈まない、夜中でも太陽が昇ったまんま。真夜中でも、昼間のように明るいというその白夜の映像をご覧くださいませしょう。

白夜の映像

真夜中の12時に撮った映像です。明るいでしょ、もう既に。そしてこれが太陽です。一番低く沈んでこの位置です。これから更に高いところに上昇していきます。太陽とは反対側にカメラをゆっくりと向けていきます。そうすると、真夜中にも関わらず、昼間と同じ青空が広がってます。これが白夜です。真ん中に見える小さな緑色が僕のテントです。テントがあって、僕がいて、テントの周りにオレンジ色の線が2本あります。この線の中に電流を流しているんです。なぜかというところのあたりはヒグマがうようよいるからなんです。ヒグマといっても別に人間を襲いにくる怖い生き物ではありません。好奇心が旺盛なんでテントを見たら近づいてくるんです。テントを触ります。触っている最中に、もしその中に僕がいてしまったら、僕もびっくりするけど実はクマもものすごく驚いてるんです。驚いたクマがパニックになって、僕のことを襲いかねない、だからそのクマを手前で止めるために、電流を流した線を張っているわけですね。電流を流すその電源はどうするか、電気なんかないところです。装置の中に、単三電池を2本入れておくだけで電流が3日間流れ続けてくれるんです。ですからリチャージャブルバッテリーを持って行って、ソーラーパネルで充電しながら使い続けるというそんなものです。価格が4万円くらい、4万円で自分の命を守ることができるので安い投資です。こうしてキャンプをしていくんですが、春の北極圏飛行機で最初に着いた時にはまだ冬の名残で雪がうっすらと残っているんですけど、でも24時間の日差しがあつという間にこの雪を溶かしてしまいます。2週間も経たないうちに、こんなだった山ががらっと姿を変えます。緑になるだけではありません、よく足元を見ると小さな花が咲き乱れています。僕の小指ぐらいしかないくらいの大きさのそんな花々がたくさん咲いているんですね。僕のテントの周りは文字通り花畑になります。この白いの全部花です。太陽の日差しが僕のテントに照り付けます、そうするとテントの中の室温がどんどんどんどん上昇していきます。アラスカは寒いところというイメージありますけれどね、暑いときには僕のテントの中、なんと45度ぐらいまで上がることもあるんですよ。もちろん入り口出口開け放った状態です。

日差しに誘われてたくさんの動物たちがアラスカ北極圏に集まってきます。冬眠から目覚める動物もいます。

野生のトナカイ、カリブーという生き物がいます。このカリブーがね、何百頭何千頭、何万頭もの群れとなってこの北極圏に帰ってくるんです。誰も見る事のないその大移動、その大移動の海に僕が取り囲まれたときの様子をご覧ください。どこを見てもカリブーだらけです。川の中もそうです、川の向こう岸を埋め尽くしているのもすべてカリブーなんですね。人間を寄せ付けない場所ですからね、こんな絶景でも目にする人はほとんどいないんです。でも地球上で毎年こんなことが行われているんですね。

カリブーがいるということは、カリブーを食べるためにほかの動物も集まってくるということです。例えば、オオカミがやってきたりもします。オオカミもクマと一緒に、なんか僕ら名前を聞くだけで「あぁちょっと怖いな」と思ってしまうがちです、でも、ほんとのオオカミってというのは人間を襲ったりする生き物ではありません。とても臆病なんです。人間の気配を察知すると姿をなかなか現してくれないような、そんな神秘的な面もある生き物なんですね。北極圏でキャンプをしていた2年前の事です。遠くを見たらオオカミの群れが走っているのが見えたんです、ものすごく遠くです。そのオオカミたちに向かって僕が、オオカミの遠吠えの真似をしました。ウオーーって言ったんです。その僕の遠吠えを聞いたオオカミたちがどうしたかっていうのをご覧ください。

映像

まず僕の遠吠えから始まります。なんかのサイレンみたいですけどね。まだ何も見えないでしょうか、真ん中あたりよく見ておいてください。やってきました。ちらほらとオオカミたちが僕のほうに向かって小走りに近寄ってきています。1頭、2頭、3頭全部で4頭が僕をめぐって走ってきます。もしかしたら人間を見るのが初めてのオオカミかもしれなそうです。それぐらい僕は遠くにいたんですね、この時。オオカミにしたらもうどうしていいかわからない感じですね、明らかに仲間ではないことはわかっているんですけど、で、これが2年前の話なんです。去年、同じ場所に行ってテントを張ってキャンプをしていました。ある朝起きてテントのジッパーを開けて外を見てみたら、また、オオカミたちがやってきていたんです、ご覧ください。また白いオオカミなんですね、もしかしたら前の年に見たあのオオカミが大きくなって戻ってきたのかもしれないです。テントの目の前です。これが2頭目。そして3頭目のオオカミもいます。こんな真っ黒なオオカミもいるんですね。テントの周りをうろうろと歩き回った後、ほどなく彼らは立ち去っていきとします。その彼らに向かって僕がもう一回、鳴き声の真似をしてみます。どういう反応をしてくれるか。この後ね、遠吠えを返してくれたんですよ。これはね、やった人しかわかんないと思いますけど感動的ですよ。オオカミとお話ができる、これを共有できるのは僕かムツゴロウさんぐらいなんですけど。こんな素敵な経験ができる場所なんです、アラスカってのはね、まだまだオオカミもたくさんいるんです。こんな風に、出会うだけでわくわくするような生き物もいる一方で、できるだけ出会いたくない嫌な生き物もいるんです、こんなやつらもいるんですよ。皆さんもご存知の蚊です、これは。蚊なんですけど、日本の蚊とは全然違います。

まず大きい。2センチくらい大きさがあるんですね、こんな蚊がものすごい大群で飛び回っているんですよ。僕がテントの中にいるでしょ、そしたらテントの外にへばりついて僕の血を吸おうと待ち構えてたりするんですね。テントの中から撮りましたこの黒い点が全部蚊なんですよ。テントの上、蚊の大群です。蜂のようにぶんぶん飛び回っている蚊の大群なんですよ。こんな状態ですから、テントの外に出ることができないんですよ。テントの外を歩こうものなら普通に息をしているだけで鼻の穴から蚊が入ってきてしまうんですよ。刺されるし、刺されてはこぼこになって痒いしね、大変なことになるんです。じゃあどうするか。テントの外に出るときは、帽子を被ったり、あとネットを被ったりする、そうしないとテントから出ることもできないんです。

さあ、それではアラスカの場所の説明をしましょう。アラスカっていうとね、遠いところというイメージあるでしょ。そんなことないんですよ。日本から直行便に乗ると、7時間ぐらいで着いてしまうんです。アラスカはアメリカの州の1つですけど、アメリカの西海岸、本土に行くよりも実は近いんです。アラスカ、ものすごく大きいです。どれくらい大きいかというと、日本の4倍ぐらい面積があるところなんですよ。この広いアラスカの北の端から南の端まで、僕は一人でキャンプをしながら写真やビデオを撮っています。

今度はまた、別の場所のお話をしましょう。今度はアラスカの南の端のお話しをしますね。その南の端には、ヒグマがものすごくたくさん集まってくる場所があるんです。なぜかという、ヒグマの餌としてのサケがいっぱいいるからなんですよ。川の中は、サケで埋め尽くされてるんですよ。小さな川に数えきれないぐらいのサケが一斉に海から押し寄せてきます。その川を上っていこうとするんですが、中には川から弾き出されてしまうサケもいるんですね。弾き出されたサケはどうなるかという、川の傍で座って待ってるクマの目の間に飛んでいってしまうんです。で、そのサケはクマが捕まえてむしゃむしゃ食べます。食べてる最中にまた別のサケがクマの目の前に飛んでいってしまうという、クマにとっては回転寿司みたいな川がありましたので、ビデオでご覧いただきましょう。

映像

これを豊かと言うんですね。で、右の下に映っているあの赤いのが全部食べ残されたサケの死骸なんです。あんなにたくさんサケがいるとクマはサケを捕まえても全部は食べないんですね。脂肪を蓄えやすい部位だけ食べて、後は捨ててしまいます。頭をかじって、あと皮、それからいくら、卵を食べて、身は食わずに捨ててしまうんですよ。捨てられた身はどうなるかという、後でカモメたちにすべて食べられてしまいます。でもね、サケも別に無駄死にしてるわけではありません。クマや、このカモメたちの糞に姿を変えて森の中に撒き散らされます。そうすると森の栄養になってくれるんですね。そうやって森がどんどん育っていきます。育った森の中で、クマも生活する、オオカミも生活するという、そんなね、海もサケもカモメもクマも全部繋がっているんですね、実は。

今映像をご覧いただきましたヒグマの映像ですけど、かなり近いところから撮っているんです。

ヒグマの映像を撮ったり、写真を撮る時だけ、僕はガイドを雇っています。他の時はまったく一人ですけど、ヒグマの時だけ危ないので、こういうガイドを雇うんです。で、ガイドというとなんかライフルを持って常にこう構えてそうなイメージありますが、そうではありません。彼は、手ぶらです。何も持ってないんですね。じゃあ彼は何の役目を果たしてくれるかという、クマの表情とか行動をよく見て、クマがどんなメッセージをこっちに発してるか読み取るんです。それを僕に伝えてくれるんです。例えばクマがイラついてるように見えたら、「あ、紀生、あのクマちょっと今イラついてるから、僕らは3メートル後ろに下がった方がいいよ」とかいうアドバイスをしてくれる、そのために僕は彼を雇ってるんですね。彼と一緒にあればかなり近くにいてクマの撮影ができます。どれくらい近くか、映像でご覧いただきましょう。まず僕の足から映ります。もちろんこのクマも僕らが後ろに座っているのは知ってるんですよ。知ってて、こんなおんきな行動してくれるんです。もうクマだらけなんです。満ち潮に乗ってサケが海から帰ってくる、そのサケたちを待ってるヒグマたちです。何頭かのヒグマがこれから映りますが、左から1頭やってきた熊が僕の目の前を通っていくんですね、目の前を横切って、向こうにどんどん歩いていきたいんです、歩いていきたいんですけど、この左の端にいるクマ、こいつが睨みを利かしているんですね。この左の端のクマが一番強いんです。睨みを利かされているので、僕の目の前を横切ったクマは向こうに歩いていくことができません。なので、引き返してきます。引き返すときに、さっきよりももっと僕の目の前を横切っていくんです。これでも大丈夫なんですね。こんな風に目の前でヒグマがサケを食べるような時もあります。ガイドを雇ってると言いました、普段ガイドは暇なんですね、暇なんで僕の横にいて、おんきにこんなことしてるんです。クマは、人間を見たからってね、襲いに来ようような生き物ではないんですが。

またじゃあ、アラスカの別の場所のお話をしましょう、南東アラスカって行って、カナダにめり込んだようなところですよ。この南東アラスカは鬱蒼とした森が広がっているんですよ。アニメに出てきそうなね、優しい雰囲気のある森ですけど。この南東アラスカに行くと僕は無人島でキャンプをします。無人島が千以上集まっている場所なんです。大きな海の真ん中にぽつんとある小さな小さな島で一人でキャンプをします。長いときで2ヶ月間テントを張ってキャンプをするんですね。

この無人島の森の様子、ビデオでご覧いただきましょう。

映像

すべてが、厚い苔で覆われています。歩いているのは僕です。もう苔だらけなんですよ。またそれがね、柔らかいんです。すごいでしょ。あんなにふわふわなんです。ふわふわなんていう言葉ではね、言い表すことができないような、そんな苔で、森が覆われています。普通に歩いているだけで、自分の体がふわふわと半分宙に浮いたような、そんな素敵な感覚が味わえる森です。ここで一人で生活をしていきます。電気もガスも、もちろん水道もありません。じゃあ水はどうするかというと、小川の水を汲むんですね。この水を飲み水にしたり、これで料理を作ったりします。

天気がいい日にはボートを用意します。3メートルほどのしっかりしたボートです。これが

20万円ぐらいするのか。これを担いで海に持って行ってエンジンをつけて、運転をするんです。アラスカはね、ボートを運転するの免許いらないんですよ。自由なんです。ですから勝手にボートを買って勝手に海に浮かべて勝手にどこでも運転していいんですよ。自由なところですよ。車の免許取るのもね、すごーい簡単なんです。僕実は日本の免許持ってなくて、アラスカの免許だけしか持ってないんですよ。もう20年くらい前に取ったんですけど、かかった費用が3千円ぐらいです。どうやって取ったかというところまず教習所みたいなのところに行ってパンフレット取って、自分で家で好きなときに勉強するんです。もういけるなと思ったら、そこにまた戻って、パソコンで試験を受けるんです。問題が全部で20問。5問まで間違ってい。ゆるゆるです。それをパスしたら、もういきなり路上で練習ができるんです。友達にお願いをして、友達の車運転するんですね。友達に横に乗ってもらって路上を好きなだけ運転して、もういけるなと思ったら試験場に行って、試験を受けて、それで合格です。それでね、日本でも運転できるんですから怖いんですね。

ゴムボートを運転して、無人島から外に出てザトウクジラを探して写真を撮るのが僕のメインの活動なんです。でもね、ザトウクジラだけじゃなくていろんな生き物がいるんですよ。ここに写ってるのはですね、死んでるように見えるんですけど実は眠ってるだけのトドです。トドがね、よーく寝るんですよ。もうぐうたらぐうたらしてるやつらなんです。いっつも寝てるんじゃないかなってぐらいなんですけど、時々、ものすごく活発になることがあるんです。そういうトドに出会った時のお話をしましょう。僕はその時ゴムボートに乗ってクジラを探していました。遠くを見ると、こっちに近づいてくる生き物がいたんです。なんだろうなと思って見てみたらそれは、このトドの群れだったんです。トドの群れが、普通は海の中をすーっと音もなく泳いでくるものなんですけど、その時はイルカのように海の上をびよんびよんジャンプしながら前に進んでたんですね。なぜか、びよんびよんジャンプして進んでいく先に、ザトウクジラがいたんです。彼らはザトウクジラを追いかけていたんです。追いかけていって追いついたらトドはクジラの周りをぐるぐると泳いで一緒に遊ぶことがあるんですね。ですからその時もクジラと遊びたかったんでしょう。びよんびよんジャンプをしながら前に進んでいました。なのでトドっていうのは好奇心が旺盛なんです。面白いものがあつたらぶいってそっちに行ってしまうくせがあるんですね。びよんびよんジャンプをしていた群れの中の1頭が、僕を発見してしまったんです。1頭が僕の方をふっと見た途端に他のトドもみんなつれて、ふっと僕の方を見るんです。それまでまっすぐ進んでいたのにふっと僕の方を見た途端に、直角に曲がって、僕の方のがーっと近づいてくるんですよ。これが怖かったんです。なぜかというこのトド、でかいんです。大きなものだと体長が3メートル超えるんです。体重1トン超えるそんなやつらなんです。そんな生き物たちが群れでもって、僕の目の前に近づいてくる。ほんとは逃げないといけないんです。僕は、逃げないといけないんですけど、トドがそうやってジャンプをしたり、目の前まで来てくれるって中々ないことなんです。なのでね、一部始終を録画してきました。中々見られない、ジャンプをするトドの様子、ご覧ください。これです。

映像

クジラを追いかけています、このあたりまではまだ良かったんです、もうすぐみんなして直角

に曲がりますからね。こっからです。僕の方を見ながら近づいてくるんですね。目の前までやってきますよ。そしてボートの下から僕の方見てるんですね。で、またジャンプをしながらクジラを追いかけていくトドの群れです。すごいでしょ。お前らやればできるじゃんって思うでしょ。でもね、こんなことは、アラスカの自然の中にいればこそ見られるんですよ。旭山動物園行ってもやってくれませんか。でも彼らにしてもこんな行動は普段はしません。きっとこの後みんな疲れてぐったりしてたと思うんですけどね。そんな感じでいろんな生き物に出会います。シャチと出会うこともあるんですね。シャチと聞くと怖い生き物だと思いますけど、ほんとはそんなことありません。人間を襲ったりはしないんですね。その日も僕はゴムボートでぶかぶか浮かんでました。遠くの方でシャチが何頭か泳いでるのが見えたんですね。ああ、シャチがいるわって何の気なしに思っていると、近くにまた別のシャチたちが、3頭くらいいたのかな、4頭くらい、いたんですね。わあわあ、近くにいるわって驚いてると、あっという間に目の前ぐるとたくさんシャチに僕が取り囲まれてしまった時の映像がこれです。

映像

襲われることはないとわかってはいるんですけど、でもあれだけ近くで見るとね、やっぱりドキドキするものです。野生の息吹をね、あれだけ近くで感じるができるんですね。こんな感じでいろんな生き物がある。空を見上げるとたくさんいろんな種類の鳥たちが飛んでいます。その中でも一際カッコイイ鳥がこれなんです。白頭鷺という鳥です、アメリカの国鳥にも選ばれています。いい面構えしてますよね。この白頭鷺は普段は高い木の天辺にちょこんと座ってるんですね。見えますか、天辺にいるの。白いのが見えるでしょ。白頭鷺なんですね。で、彼今何をしているかと言うと、海の方をじーっと見て、魚を探しているんです。自分が餌にする魚を探してるんですね。それを見つけたら、魚に向かってすーっと飛んでいきます。海面すれすれを飛びながら、脚を一瞬だけ伸ばして魚をぱっと捕まえます。捕まえたまま、ばさばさと飛び去っていくというカッコイイ狩りをする、そんな鳥なんですね。カッコイイ狩りをするんですけど、ごく稀に失敗をすることがあるんです。僕が見た失敗はこうでした、白頭鷺が魚を見つけて飛んでいきます、海面すれすれを飛びながら脚を伸ばして魚をぱっと捕まえたところまでは良かったんですけど、捕まえた魚が重すぎたんです。白頭鷺は海にぎぶんと入ってしまいました。一旦海に入ってしまうと白頭鷺はもう飛ぶことができないんです。一回陸に上がらないと、飛び立つことができないんですね。鋭い爪にはもう大きな魚が食い込んだまんま。じゃあその白頭鷺は海の中でどうしたかと言うと、泳ぎ始めたんです。この大きな翼を使って泳ぎ始めた。しかもバタフライで。バタフライをする白頭鷺。アラスカの人でもほぼ見たことがないという貴重な映像です、ご覧ください。ね、バタフライしてるでしょ。もっと近くで見てもみましょうか、そうするとね、ものすごく不機嫌な顔してるんですよ。そりゃあ不機嫌ですよ。普段こんな失敗しませんからね。ワシとしたことがと思いながらこうやってね、泳いでいったんですね。延々と、数十メートル岸まで泳いでいったときの映像ですよ。シュールですね。こんなことが実は行われているですよ、こんな風にいろんな生き物と出会うだけではなくて、たまにですけど、人と出会うこともあるんですね。海にぶかぶか浮かんでいますと、大きなボートに乗った人たちと出会います。彼ら船旅をしている人たちなんですね。一週間から10日、船の中で寝泊りをしながら暮らしてる優雅な人

たち。彼らが僕を見つけると近づいて来てくれるんです。なぜかという、遭難してるんじゃないかと思うみたいです。そらそうですよ、アラスカの大きな海に、あんなおもちゃみたいなゴムボートで浮かんでるやつは他にはいないんです。なので、あいつ大丈夫か、と寄って来てくれるんです。で、話しかけてくれるんですよ。いろんなこと聞かれますよ。お前なんでこんなことしてるんだ、なぜここにいるんだ、親はどう思ってるんだとかね、いろんなこと聞かれるわけです。でもまあ、いい人たちですからね、基本、いい人たちなんで、いろんな会話をした後、帰って行くんです。帰って行く間に、元気でな、って言って元気付けてくれるんですけど、なんでですかね、みんなこうやってね、僕に食べ物を恵んでくれるんですよ。僕がよっぽどみずぼらしく見えてるのか、何なのかわからないんですけど、いろんな物くれますよ、これね、ジュースくれたり、びっくりしたのこれですよ。えええって思うでしょ、アラスカの何にもない海のど真ん中でなぜ月桂冠って思うんですが、もうね、日本酒なんてのはアラスカの小さなスーパーでも売ってるんです。僕が日本人ってわかったんで、あの船の人たちはわざわざ船の倉庫から日本酒を引っ張り出してきてくれたんですね。そうかと思うと、魚や、蟹、取れたての魚や蟹をくれる人たちもいるんですね。もちろん生きてるんですよ。もらった魚を、僕が自分で持ってた小さなナイフでさばいて食べたんです。でも、魚がでかいんで、もうお腹いっぱいになったんです僕。で、もう蟹は食べられなかったんですけど、まだ生きてるんです蟹。生きてるから、普通だったら冷凍庫に入れたりするでしょ、でもそんなものないから。あーどうしよっかなあって思ったんですね。放っておいたら腐っちゃうし、いいことを思いついたんです。ペットにしようと思ったんです。海の中に入れといたら、死なないでしょ。ペットにできるじゃないですか。でも、多分海の中に入れといたら逃げるでしょ、逃げないように、ペットみたいに紐で縛りましてね。ほんとに飼ったんですよ。これをね、二週間ぐらい飼いました。名前つけてね。らくちゃんっていう名前つけて飼ったんですけど。飼ったりすると駄目ですね、情がわきます。結局ね、食べられなくなりまして逃がしたんです。「捕まるなよ、元気でな」って逃がしたんです。もうね、何年も前の話なんですこれは。何年も前の話なんですけど、今でも気になってるんです。あいつ大丈夫かな。特に日本に帰ってくるとね、捕まってないかなってすごい気になるんですよ。こんな感じで、たくさん魚がいるんですよ。豊かな海です。みなさんが日本で食べてるサケもアラスカからたくさん輸入されています。スーパー行って見てみてください、サケが並んでるところ。アラスカ産サケもたまにあったりね、あとノルウェー産とかチリ産っていうのは、養殖物なんですけど、アラスカ産は必ず天然なんです。サケ、海で跳ねまわった後どこに行くかという、自分が生まれた川に帰っていきます。川の匂いを嗅いでその川に帰るんですって。すごい能力ですよ。そのサケの後を追いかけて僕は川の探検に行くことがあります。ゴムボートを運転して海から川の入り口を見つけて、どンドンどンドン川を遡っていきます。そうすると、サケが帰るような川は綺麗な水が流れているんですけど、だんだん遡るにつれて今まで綺麗な水が今度はどンドンどンドン黒くなっていく、そんな川に出合うこともあるんですね。真っ黒な川です。真っ黒な川に見えるんですけど、実はね、水は透明なんです。綺麗な水が流れてるにも関わらず、なぜ他の部分が真っ黒かと言いますと、黒いのが全部サケなんです。このサケを食べるために、たくさん動物たちが川に集まってきます。オオカミもやってきます、白頭鷲、そしてヒグマ、更には黒クマがやってきたりするんですね。この黒クマもね、人間を襲うような生き物ではありません。またこの黒クマが木登りが上手なんです。細い垂直に立ってる木にね、ひよいひよいひよいひよ

いと登っていったりするんですよね。かわいいものですよ。こんな感じで森の中には黒クマがたくさんいるんです。で、黒クマの撮影に行く時は僕はガイドを雇いません。ヒグマほど凶暴ではありませんから、一人で森の中に入っていきます。でも、ずかずかと森の中に入るわけではありません。ちゃんとやることやってないと襲われます。やることは何かと言いますと、声を出して、あと手をパンパン叩くんです。こっちの存在をクマに知らせるんです、人間が入ってくるよっていうのを知らせるとそれだけでクマは近寄ってこないものなんです。でも、もしその音や声が届かなかった時、目の前でクマとばったり出会ってしまった時には、危ないので、そういう時のためにこういう物も常に携帯しています。クマ除けのスプレーですね。これを常に腰のところに付けておいていつでも取り出せるようにしています。でもね、これ使えない時があるんです。風が僕の方に向かって吹いていたら、これ使えないですから、そういう時のために、これも持ってるんです。これ発炎筒です。この先からね、火花が出てこれでクマを撃退しようというものなんです。常にこれを身に着けています。こういう用意をしてるんですよ。でもね、一回も使ったことはありません。スプレーも発炎筒も、一回も使ったことはない、それぐらい、クマの方で僕のことを避けてくれてきているということなんです。これだけの用意をしてこそ初めて、人間も平和に暮らすことができるし、クマもね穏やかに生活していくことができるんですね。

さあ、ザトウクジラの話をしさっきしましたけど、ザトウクジラは、でっかいんですよ。体長がね、15メートルありますから、特大のバスぐらいなんです。体重はなんと40トンもある、そんな生き物が、一瞬にしてこうやって宙を舞います。このブリーチングと呼ばれるジャンプ、10回20回、30回と休むことなく繰り返すこともあるんですよ。夏に、南東アラスカに行くとザトウクジラだらけです。ザトウクジラが呼吸をすると、吹き上げられた息が白い煙のようになって見えるんですね。たくさんクジラが群れとなって泳ぎます、その泳いでる進行方向に、僕がボートに乗っていってしまうことがあるんです。ぶつかったらお終いです。僕は海に投げ出されてしまって、冷たいアラスカの水にやられて30分ぐらいで死んでしまうんですね。ですから、クジラが近づいてきたら僕はどうするか。音を出すんです。ゴムボートを手のひらでバンバンバンバン叩いて音を出すと、クジラがちゃんと避けてくれるんです。避けてくれるのがわかってるんで、僕も余裕を持ってビデオを回せるんですね。じゃあなぜこんなにたくさんザトウクジラがいるかと言いますと、彼らは餌を食べに来てるんです。普段ハワイにいるクジラたちが、夏になると、4000キロぐらい泳いでアラスカの、この海に帰ってきます。南東アラスカの海に帰ってくるんですね。どんな餌を食べるかと言いますと、オキアミとか、ニシンを食べます。ニシンを見つけたクジラたちが群れを作って集団で狩りをします。バブルネットフィーディングっていうね、豪快な狩りをするんですけど、どんな狩りかと言いますと、このニシンを見つけたクジラが5頭から8頭ぐらいのグループを作って、このニシンの群れの下に潜り込んで行きます。潜り込んだ後、そのグループの中の1頭だけが呼吸をする穴からあぶくを出します。近くで見ると豚の鼻みたいな穴してるんですよ。そこからあぶくを出しながら、大きく円を描いて泳ぎます。そうするとあぶくが下から上にあぶくあぶくと上がってくるにつれて、海の中にあぶくのネットが出来るんです。これがバブルネットです。このバブルネットの内側にさっきのニシンを閉じ込めてしまうという頭のいい作戦なんです。閉じ込められたニシン目がけて今度は下からクジラたちが大きな口を開けて飛び上がってきます。飛び上がってきながらニシンを海水ごと口の中に入れてしまって、そのまんまの勢いで海の外にまでざぶんと出てきてしまう、それぐらい豪快な狩りをするん

ですね。体重40トンもある彼らが一斉に示し合わせたかのようにこうやって飛び上がってくる時の迫力は、凄いの凄くないのって、どっちだと思います？凄いです。見てるだけでわくわくドキドキするんです。僕もう40過ぎてますけど、こんなおっさんでも、これ見るとドキドキドキドキするんですよ、動悸じゃないですよ。もう興奮して、ほんとにドキドキするんです。でももっと面白いことをね、彼らはやってくれるんです。何かというと、飛び上がってくる前、まだ海の中にいる時に幽霊みたいな声を出すんですよ。こんな声です。うう~~~~~っていう声を出して、これ叫び声なんです。叫び声を出して、ニシンをバブルネットの内側に追い込んでるんです。その声が、ボートの上にいる僕のところまで、はっきりと聞こえてくるんです。でもクジラの姿は一切見ることが出来ません。なぜかというとアラスカの海が濁っているからなんです。それは、水が汚いからではないんです。逆です。水が綺麗で、プランクトンが多すぎて水が濁ってる。だから、中の様子は一切見ることが出来ない。見ることが出来ないけど、声ははっきりと届いてくる。そうすると僕の想像力が働くんですよ、その幽霊みたいな声が聞こえてきたら、ああボートの下のどこかで今クジラがゆらゆらと泳ぎながらニシンを追いかけてるんだって想像するだけで、またわくわくドキドキするんです。ふっと目の前の海面を見るとあぶくがぷくぷくと上がってきてるのが見えるんです。そのあぶくが大きな円を描きます。大体直径10メートルぐらいの円を描いたところで、円の内側からびちゃびちゃ跳ねる生き物が見え始めるんですね。ニシンが逃げようと頑張るんですよ。逃げようとするけどもう手遅れです。次の瞬間には下から大口を開けたクジラたちが一斉に飛び上がってきて、ニシンを丸呑みにするというバブルネットフィーディング、ビデオをご覧ください。さあ今からクジラのグループが、ニシンの群れの下に潜り込もうとしているところです。尾びれを高々と持ち上げて、潜り込んでいきます。

映像

この後アラスカではね、紅葉の見られる秋があって、その後冬のアラスカ、冬になるとまた僕はアラスカに戻って、オーロラの写真を撮り続けてるんですね。このオーロラの写真、真ん中に赤い色が出ていてハートのような形をしていますね。赤い色というのが中々出ない色なんですよ。いろんな色があって、緑っぽいもの、白、黄色、ピンク、紫、いろんな色があって、その中でも赤色が中々出ないんですね。こういうオーロラを撮るために、アラスカのある場所に行きます。真ん中あたりにね、アラスカレンジという場所があるんですけど、アラスカ山脈の中に入っていくんです。なぜかと言うと、オーロラが見えやすいから、ではないんですね。実は見えにくいんですよ。山の天気って不安定で悪いて言うでしょ。アラスカ山脈の中の天気も悪いですね。天気が悪くと、オーロラっていうのはまず見ることはできません。雲に遮られてしまうので、天気が良くないと見られないんですね。じゃあなぜあえてそのアラスカ山脈の中に入っていくかというと、山脈の中にこの山があるからなんです。北米大陸最高峰のマッキンリー、今の名前はデナリという山です。高さ6200メートルほどあります。大きな大きな山です。この大きな山の上空をオーロラが埋め尽くすことがあるんです。それが見たくて僕はこの山の目の前にいてキャンプをします。目の前に行く、どうやって行くか。ここも道路も鉄道も何にもないところです。また、小型飛行機をチャーターするんですね。で、飛行機の中に荷物を積んで、100キロの距離を飛んでもらって山の目の前に降ろしてもらいます。一回行くと、50日間帰ってきません。そういう冬

を、もう20年ほど続けています。50日間の装備を積み込んで飛行機で山の目の前に降ろしてもらいます。雪の上に着陸をします。普通に着陸できないんですね。飛行機にスキーをつけて滑らせながら着陸をするんです。でも雪が深い時にはこのスキーを着けておいても普通に着陸できません。スキーごと雪の中に埋もれてしまいますから。じゃあどうするか。そういう時はどうするかと言うと、着陸したい日の前の日のうちに飛行機で飛んで、その場所に行きます。で、降りたい場所が見えてきたらどンドンどンドン飛行機の高度を下げて、一旦着陸をしてしまうんです。着陸して、普通だったらそこでエンジンを切って飛行機を止めるんですけど、この場合は止めません。着陸したままの状態、前に何百メートルも進みます。進みながらこのスキーで雪を押さえ付けるんです。そうやってもう一回飛び立ちます。飛び立って、もう一度同じ場所に着陸をして、また前に進みながらこのスキーで雪を押さえ付けるというこの作業を何度も何度も繰り返して、雪を固めて、雪の滑走路を作るんです。でも雪ですから、そんなにすぐには固まってくれません。一旦村に帰って一晩待ちます。翌日になってようやく前の日に作った滑走路に降り立つことが出来るんですね。そういう手順を経ないと中々行くことすら出来ない場所なんです。飛行機の中狭いんです。パイロットが座ってる横に僕が身を寄せ合うようにしてちょこんと座ります。飛行機の下を見下ろすと氷河が広がっています。氷河の割れ目のクレバスだらけです。ここには降りることはできません。前の日に作った滑走路の上に着陸をします。この日の気温はマイナス30度くらいです。飛行機のエンジンが凍ってしまうんです。そうならないうちに、パイロットは僕と荷物を降ろしたら逃げるように村に帰っていきます。飛行機が去った後は、静寂の世界です。物音1つしない、真っ平らな雪原の上で、これからキャンプをします。雪の下には氷河が敷き詰められている、そんな場所です。孤独だな、辛そうだなって思うかもしれませんがね、当の本人は喜んでるんですね。あったかそうに見えるでしょ、青空が広がってますから。とんでもない。これは真冬の厳冬期に撮った写真です。厳冬期のアラスカの山中、寒いんですね。一番寒い時マイナス50度っていうのがありました。どんなに寒くても、暖房なんかありませんからね。寒さをしのいでキャンプを続けるしかありません。どうやって生活をするかと言いますと、かまくらを作るんですね。スコップ2つで出来てしまいます。まず大きなスコップでひたすら山を積み上げます。昼も夜も起きてずーっと山を積み上げるんです。山が出来たらその山の中を小さなスコップでくりぬいて行って部屋をつくります。5日間かけて巨大なかまくらを作ります。孤独ですね、これね。大体山が出来ると、その山の上に乗って天井を足で踏んで固めます。後でね、部屋を作った時天井がどすんと落ちてこないようにするためです。小さなスコップで中をくりぬいて部屋を作ります。くりぬいた時に中から出てくる雪も、かまくらの上に積んで、出来るだけ大きなかまくらにしていけます。大きなかまくらを作るとかかないと、吹雪が来た時に壊れてしまうんですよ。壊れたらもう、僕の命はありません。なので、大きな大きなかまくらを作って、50日間この中で過ごします。1個のかまくらがね、50日持ってくれるんですよ。で、出来たら、入り口にべらっぺらのシートをかけて完成です。別にね、入り口を密封するわけではありません。かまくらの中が明るいのはね、蠟燭の光なんです。蠟燭の光でちゃーんとね、本を読むことが出来ます。衛星電話を持って行って、毎日ね、日本で待っていてくれる奥さんに20分ぐらい30分ぐらいかな、電話をするんですよ。あと、ダンボールの箱に本がたくさん入ってます。本はね、重要ですよ。たくさん持っていくんです、50冊ぐらい毎年日本から持っていきます。本がないとね、他にやる事が無いんですよ。ここはとにかく天気が悪いんで、やる事と言えば雪かきか、本を読

むかくらいなんです。たくさん本を持っていく、でもすぐ読み終えてしまう。読み終えてしまうとやる事がなくなります。これは辛いんですよ。皆さんだったらやることないって言っても別に、携帯いじったりテレビ見たり何でもできるでしょ。でもね、僕はほんとに何もないから、困るんです。気が狂いそうになるんですよ。ああ困ったな、どうしようかなっていう時にはね、僕何をするかという、小さな雪だるまの友達を作ったりするんですよ。友達作るのはいいんですけど、大きさが小さいですからすぐ出来てしまうんですよ。すぐ出来てしまってまたやる事がなくなるんです。ああ困ったなあ、退屈だなあどうしようかな、っていう時には友達増やして家族にしたりするんですよ。こんな風にしながら撮影を続けていくんですけど、オーロラを待ってるんですけど、オーロラは中々出てくれません。でもね、オーロラが出なくても、月の明かりが出るだけで、とてもあたりがね、綺麗になるんです。満月が出るとね、周りの風景がくっきりと浮かび上がるんです。満月がどれだけ明るい、実験してきたんです。今満月が出ています。この方向に、大きくて明るい月が光り輝いているところです。その月明かりのおかげで、周りの山々や僕のかまくらがくっきりと浮かび上がっています。満月がどれくらい明るい、月の光で文庫本が読めるんです。すごいでしょ。マイナス40度の中一人でこんなことしてるんですよ僕はね。

生活の様子もうちょっとご覧いただきましょうか。これはバケツです。蓋付のバケツ。何のために持っていかと言うと、これがね、僕のトイレなんです。夏は穴に埋めましたけど、冬はそういうわけにはいかないんですよ。雪の穴掘って埋めといても分解されませんから、そのまま残ってしまうんです。僕が出したものがね。なので、全部持って帰ります。おしっこはそのあたりにしていいんですけど、誰もいませんからね、いいんですけど、そうじゃないものはね、全部持って帰るんです。50日間のキャンプの間僕が出したものをこのバケツに積み込みましてね、キャンプが終わるとこのバケツの中身ごと飛行機に積みまして村に持って帰ります。

天気のいい日がたまにありまして、かまくらの中から遠くが見渡せるんですけど、天気の悪い日は、いわゆるホワイトアウトです。何にも見えなくなるんですよ。真っ白で何にも見えなくなると、遭難するので、そうならないために、色がついたものをかまくらの周りに置いておきます。入り口にかけた黒いシートはそのためです。それから、細い竹の棒をかまくらの横に置いています。色がついたものだったら何となく見ることが出来るんですよ。なので、かまくらの場所を見失うことはないんです。でも、かまくらの輪郭もわかんないです。全てが真っ白になるんです。ゆっくり雪が降ってる時はまだいいんです、でもね、怖いのは、風です。僕なんか飛ばされかねないような強烈な風が吹くことがあります。音を聞いているだけで怖いような風です。そういう風が吹き始めると、風が雪をかまくらの周りに運んできます。大きなかまくらでも雪にすっぽりと埋もれてしまったりするんですよ。

キャンプも終盤に差し掛かると、雪を足で踏んで固めて滑走路を作らなければいけません。昼も夜も歩き続けて雪を固め続けて、飛行機が迎えに来てくれるための滑走路を作るんですよ。何日もかかって作ります。気の遠くなるような作業です。これをやっておかないと、迎えに来てもらえないんですよ。でもね、何日もかかってこの滑走路を作るでしょ。ああやっと出来たっていう時に天気が変わってね、全部なくなったりするんですよ。でもちゃんと作っとかないといけませんね。

こんなふうにオーロラを撮るためにね、一人でキャンプをするんですけどね。オーロラはね、

全然出てくれません。一冬50日キャンプする間、大体ね、毎年3日間ぐらいです、オーロラが出るのは、ほんとはね、もっと出てるんです。出てるけど、僕が行っている場所が天気が悪いんで見えないだけなんです。オーロラ、ツアーでアラスカに行く人たちはもっと天気のいいオーロラが出やすい場所に行くので、かなりの確率でね、オーロラ見ることが出来てるんですね。僕はあえてこういう場所を選んできます。あえてこういう場所を選んではるんです。あえて無人島でキャンプをします。あえて一人で、誰もいないところで、長期間キャンプをしながら写真を撮ります。写真家がみんなそういうことをしてるわけではありません。ほとんどの写真家はそんなことはしないんです。効率が悪いからです。写真家、写真を撮ってお金を稼がないといけない、だから僕みたいなことをする写真家、ほぼいません。じゃあなんで僕はこんなことをしてるかと言いますと、僕はね、どう撮ったかっていうことにこだわりたいんです。何を撮ったかよりも、どう撮ったかっていうことの方が僕にとっては大事なんです。僕の人生にとってはそれが大事なんで、あえてこういう撮り方をしてるんです。何を成し遂げたかっていうことよりも、どう生きたかっていうことに僕は重きをおきたいので、あえてこういう撮り方をしてるんです。出来る限りこういう撮り方を続けていきたいと思って、頑張ってます。

またね、もしかしたらどこかでお目にかかる機会があるかもしれません。そういう時はね、ぜひ足を運んでいただきたいと思います。話が長くなりました、すみません、最後にね、オーロラをたくさんご覧いただき、今日のこのショーを終わりにしたいと思います。曲2曲流します。1曲目流れる間に写真が流れて、その後映像が流れますので、ごゆっくりとご覧ください。

映像

以上です、どうもありがとうございました。